

## 論文の和文要旨

論文題目	現代日本語における「-は」「-が」の意味と機能
氏名	あさ やま ゆ き 浅山友貴

### 1) 問題の所在、本稿の立場および目的

本稿の目的は、「は」(=主題)、「が」(=主格)として別次元に固定して違いを強調するのではなく、両者の共通する領域を認め、共通領域を軸に両者の対立構造のシステムを明らかにすることにある。

従来「は」は常に「主題」という機能から記述されてきたのに対し、「が」は連体節内部にとどまる「主格」と説明されてきた。しかし両者を全く異なる領域に常に固定するという考え方には問題がある。一般に「主題」は同時に「主格」であり、それを分けるもっともな理由がない限り重なると言われている。従来「は」(主題)と「が」(主格)が重なることについて、「は」が「が」を「兼務する」という説明が行われ、形式として「は」のみ表示されると説明された。しかし「が」と「は」は「がは」と重ねることができないように、実際はどちらか一方を選択しなければならない。つまり「主格」であり「主題」でもあるという関係は、言語形式上成立していない。「犬( )走っている。」という時、「は」を使用するか「が」を使用するか選択しなければならないからである。これは対立し排除しあう関係であるが、「兼務」という説明はこの事実を曖昧にしている。

このような見方に立つ時、次に浮上してくる疑問は、「主格」を提示するためになぜ二つの言語形式が必要なのかという問題である。「は」が「主題」に固定されたため、このような問題については従来全く議論されなかった。本稿ではまずこの問いを立てることによって全体を捉え直してみたい。

まず、複文では「は」「が」の両者があることで「私は、彼がいる部屋にいた。」のように「私」「彼」という二つの主語の連続を読み取ることができ、係り先を分担していることが知られている。このことは従来「主題」と「主格」の機能から説明されてきたが、これは二つの「主格」の問題として考える必要がある。なぜなら「主格」が二つ連続して並置され、述語と離れてしまう文が頻繁に起こる日本語において、その係り先を分担するために「は」「が」が機能しているからである。これは情報の次元における「主題」の役割とは区別する必要がある。

次に単文はどうか。この場合、係り先を分担するという機能は必要なくなる。統語的には係り先を分担しなくてよいのだから「は」「が」二つの形式は必要なくなり、一つで足りることになる。しかし一方では複文のために両者を保持しなければならない。そうすると主語として

の意味を分化させることで共存せざるを得ない。実際「彼は／が学生だ」のように、他の候補がいるかいないか等、主語である人や事物の提示の仕方に係わる意味の成立に当たり「は」「が」が異なった主語の提示の仕方を分担していることが認められる。

このように考えれば、従来、個別に記述されてきた現象について統一的に説明する手掛かりができるのではないだろうか。主語にそのような意味の分化が生じる理由、そのメカニズムについても並列的に記述するだけでなく、互いに密接に関連しながら体系を成していることを説明することができる。本稿では以上のような問題意識に基づき対立を成すシステムとして「は」「が」を考察し、実例をもとに様々な文において、主語としての意味に分化が生じている実際を記述し、先の仮説の論証を試みる。

## 2) 本稿の仮説および結論

### 〈複文〉

本稿で以上の論証を行うに際して、まず統語的な機能の分担を基本とする次のような仮説を立てた。

#### 仮説(1) 統語的な関係を表す仮説

「は」「が」は、複数の主語の連続を許容し、統語関係を表すために機能する。

「が」は、基本的に、直後の述語と結び付く。

「は」は、基本的に、直後にある述語と必ずしも結び付くとは限らない。

既に述べたように、複文については日本語の場合「主語1－述語1、主語2－述語2」という構成だけでなく「主語1、主語2－述語2、述語1」という構成を取ることができる。「は」「が」二種の「主格」提示形式があることによって主語が二つ以上並ぶ構造の理解を容易にしている、という仮説のもと、多重主語文を許容する上で「は」「が」が機能していることを論証する。

### 〈単文〉

次に単文では、複文で必要な統語機能が不要になり多くの文で文法的に「は」「が」を入れ替えることができるものの、「は」「が」を入れ替えると一方に「対比」や「選択指定」と呼ばれる意味が付与されるのに対して、他方はそのような意味が生じない。このような意味が生じている理由について従来は統一的に説明されなかった。

これについては次のように説明できる。複文では専ら係り先の分担のために「は」「が」が必要であり、ここでは主語の意味に分化が起こらなかったが、単文では逆に係り先を分担する機能は不要となる。単文で「は」「が」に主語の意味の分化が生じるのは、係り先の分担が不要になり主語の提示の仕方をどうするかという主語の意味の分化に専らその機能が移行しているためだと考えられる。

しかしこの議論が複雑な様相を呈し、容易に解決ができなかった原因は「は」「が」の入れ替えが意味的に非常に難しい場合と容易にどちらも使用できるもの、この両面を同一の視点で

捉えることが困難であったことにある。

このような問題は両者の違いが際立った文だけ比べていても明らかにはならず、そのような大きな違いはもとより、微弱な差異に至るまで、あらゆる主語の意味を成立させることのできる総体として考察しなければならない。そのために、現象・判断などの心理学的な色彩の濃い意味に頼ることや、名詞文、動詞文という述語にのみ多くを頼ることをやめ、最終的に主語をどのように捉え提示するかという主語の意味および機能から統一的な説明を試みた。实例を分析し「は」「が」が使用された文の主語の違いを考察した結果、主語の意味として「認識者」「認識対象」および「集合構造」「単独構造」という意味を分担していることを確認できた。次頁の図はそれを説明するものである。

仮説(2) 主語の意味的な差異を表すために必要な仮説

「は」「が」は、統語関係を表す義務から解放されている時、主語の意味的な分担を行う。

「認識者」が明示されない時、「認識対象」について、以下の分担をする。(仮説2-1)

「は」:「単独構造」を持つものとして主語を提示する。

ここに「が」を使用すると指定的な意味が生じる。

「が」:「集合構造」を持つものとして主語を提示する。

ここに「は」を使用すると対比的な意味が生じる。

例) (非明示) 彼は／が 学生だ。(名詞文)  
認識者 認識対象

例) (非明示) 雪は／が 白い。(形容詞文)  
認識者 認識対象

「認識者」が明示される場合、「認識者」と「認識対象」を分担する。(仮説2-2)

「は」:「認識者」を積極的に主語として提示する。

ここに「が」を使用すると指定的な意味が生じる。

「が」:「認識対象」を積極的に主語として提示する。

ここに「は」を使用すると対比的な意味が生じる。

例) 私は部屋のドアを開けた。暖炉の前に犬がいた。(自動詞文)  
認識対象

例) 私は 犬が 好きだ／見える／恐い／等  
認識者 認識対象 (形容詞、自動詞文)

「動作主」が明示される場合、「は」「が」の意味的な分化は微弱なものとなる。

例) 太郎は／がそっと部屋のドアを開けた。花子は／が部屋を見回した。  
動作者

ポチは／がスリッパを噛んでいた。太郎は／がポチをなせた。(他動詞文)

動作者

動作者

仮説(2)の図内にある「単独構造」「集合構造」というのは、主語と、他の主語候補との関係について、空間認識的なモデルに置き換えたものということができる。このように主語候補について意識させる意味が「が」にあることは古くから指摘されているが、多くの場合、名詞文の構造の違いを分析、解釈するという記述に集中しているようである。本稿では、このような枠組を「は」と「が」の対立関係の意味の主軸として規定し、このことによって様々な意味の分化が起こる現象について統一的に理解することができることを、名詞文から動詞文に至るまで様々な環境の文について検討し、凡その傾向を明らかにした。

「認識者」「認識対象」というのは、単文における「は」「が」が1人称とそれ以外、つまり主観的な主体(は)とその他(が)の区別の上で重要な機能を果たしていること、そのような主語の役割の分担に関する規定である。

「が」は「主格」を表す動詞ではあるが、既に知られているように1人称に使用しにくく、「は」が専らそれを分担している。1人称の主格を提示することが避けられるということは、「主格」として特殊なものと言えるのではないだろうか。なぜ1人称主格に「が」を避けるのかという問題をつきつめていくと、このような意味上の分担が「は」「が」によって実現されていることはいきあたる。

自動詞文は、存在や状態を誰かが認めるという内容を持つものが多いが、その場合に「認識者」「認識対象」の分担が必要となる。その区別が明らかでないと「人が～する」の「人」が能動的な主体なのか、それとも「私」に見いだされた対象なのかが不明瞭となる。このため「私」は「は」を専ら使用し、「認識者」であることを明示するための「が」を使用することが難しい。一方、「私」が認識する「認識対象」にあたる「人」には専ら「が」を使用する。このことは実例および自動詞文で「は」「が」を容易に置き換えることができないことから確認でき、そのような役割分担の存在が確認できる。

「が」は従来より「水が／をほしい」のように「を」と交替できることが知られ「対象語」として、「ほしい」「～たい」や知覚などの文においては、目的語を提示することが議論されているが、そのような意味がほとんど意識されないような自動詞文においても「認識対象」という役割を積極的に果たしていると考えられることで「が」は主格として特殊な意味・機能を発揮していると考えられる。

一方、能動的な内容を持つ他動詞文では「は」「が」の差異が自動詞文よりも弱く、両者を入れ替えることが容易になる。母語話者であっても使用に揺れが生じ、従来言われていたような「は」「が」の差異を強く強調する見方が有効ではないことが実例から確認できる。では、なぜ能動的な他動詞文では、自動詞文のように差が際立たないのか。この理由も先の「認識者」「認識対象」という分担から統一的に説明できる。他動詞文では、自動詞文にあったような「認識者」「認識対象」という分担が殆ど必要なくなる。なぜなら自動詞文のように「認識対象」にあたる人物を「が」で示す必要がなく(対象は「を」で明示できるため)、「は」「が」はどちらも能動的な「動作主」を示すために使用されるため「動作者」という意味が全面に出て先のような主語の意味の分担は後退していくと考えられるからである。

「が」が「主格」としては特殊なものであるというのは「集合構造」として主語を提示していることや、「認識対象」を積極的に表していることから生じていると考えることができ、こ

のことから「は」は従来考えられていたのと異なり、このような意味を「が」と共に担い、「主格」としての重要な意味機能を「が」と分けあっていると考えることができる。

以上、従来の説の検討、それに基づく仮説の構築と実例による検証が本論の主な骨子であり、上述の通り多くの実例について、なぜ、どのように「は」「が」が使用されるのかに関して、文法および文の領域から仕組みを分析した。